

阿英による林紘冤罪事件

『吟辺燕語』序をめぐる

樽本照雄

阿英は、林紘+魏易共訳『吟辺燕語』について何を書いたか。

本稿は、阿英が行なったその説明を問題にする。それは、林紘がシェイクスピア戯曲とラム小説をどう把握していたかについて考えることになる。

阿英が、林訳について説明したわずかな語句にすぎない。だが、林紘のシェイクスピア理解の根幹にふれるものなのだ。

阿英の記述は、林紘に関連する別の誤解を生みだした。のちの研究者は、学界の権威阿英の文章に思考が束縛されてしまう。誤りが阿英からはじまり、現在に継承される。

林紘に関する阿英の誤解は、どういう文脈から生まれたのか。過去を追究していくと、阿英の前にいる人が必然的に姿をあらわす。彼らは、いかにして林紘に濡れ衣をきせたのか。そこに行きつく。

本稿で扱うのは、『吟辺燕語』の林序そのもの、および阿英の短い説明が主となる。あわせて、劉半農、鄭振鐸による有名なある断言を検討し、『澥外奇譚』の叙例、王国維の論文などに言及する。

ラム姉弟作品の漢訳2種類から話をはじめよう。

青少年のためにシェイクスピア原作の戯曲を小説に書き直したものがある。ラム姉弟 (Charles Lamb, Mary Lamb) 『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』(1807) は、そのなかのひとつだ。あまりにも当たり前のことを書いているように思われるだろう。「そのなかのひとつ」という箇所にご留意いただきたい。

中国におけるラム版最初の漢訳は、『澥外奇譚』(達文社1903) をあげなければならない。私は、説明を必要としない周知の事実だと思っていた。だが、中国話劇研

究を専門にする日本の研究者でそれを知らない人がいることを知って少し驚いた。当時の中国で、いくら普及しなかった翻訳だったとはいえ、それを現代の研究者が知らないでいい理由にすることはできない。該書に言及する目録、翻訳文学史が、普通に刊行されているからだ。

ラム版の全訳は、林紘が魏易と共同で漢訳した『吟辺燕語』(1904)である。

今では常識となっている事実だ。しかし、林訳が発表された当時の中国では、ラムの原作だとは必ずしも認識されてはいなかった。1904年当時どころか1927年の序がついている『訳書経眼録』*1(出版は1934年)は、『吟辺燕語』を紹介しながらラムの存在にはまったく触れないのである。

林訳そのものを見ても、ラムは出てこない。林紘は、明記しなかった。シェイクスピア作品だといいいながら、翻訳は小説体になっている。これが文学革命派によって林紘批判の根拠とされた。

今からはるか昔にさかのぼらなくてはならない。しかも、それに加えて阿英によってある断定がなされた(本稿の主題だ)。

その結果、林紘はシェイクスピアについて何も知らない、と今も非難の声が続いている。林紘は、200種をこえる翻訳書を刊行した中国の知識人だ。その林紘が、シェイクスピア戯曲を知らないとは信じがたい。だが、阿英はそう主張して林紘を罵るのである。

林訳批判のきっかけ

文学革命が提唱される過程において、林紘の姿はもともとほとんど影も形もなかった。

1917年、胡適は、林紘が書いた論文に言及した。だが、その内容には大いに失望したことを表明している。つまり、敵としては資格が十分ではないと林紘について胡適は判断したのだ。ところが、それから1年足らずして、突然、林紘は文学革命派から反対派の代表として名指しされ痛罵されることになる。

1918年、林紘を「旧文人」の代表者に指名して批判を加えたのが、銭玄同と劉半農のふたりだった。文学革命派がしかけた「なれあいの芝居(手紙)」である。銭玄同が変装して登場し、劉半農がそれをやり込めるという配役だ。

銭玄同は、王敬軒という偽名を使い、林紘を擁護する風を装って『新青年』に手紙を寄せた(形にする)。該誌第4巻第3号(1918.3.15)の「文学革命之反響」欄に

掲載された。それに対して劉半農がいちいち反論する。これが筋立てである。題名は、最初つけられていないから「答覆王敬軒先生」などとよばれる。

偽名の書簡を捏造したのには理由があった。有名な話で、しかも誰も疑わない。

胡適、陳独秀あるいは錢玄同らが主張する文学革命に対して、言論界ではなんの反応もなかった。仲間内の雑誌では文学革命を主張し威勢のいい論文が発表される。だが、それに対してもとからの文人たちは無視して反論してこない。文学革命派はしびれを切らしてひと芝居うった。これが実際にあったいきさつである。

錢玄同は、守旧派であればこう主張するだろうと考える論理を勝手に組み立てた。主張する人間の実態が存在しない。問いただされたばあいは答えようがない。ゆえに、実名で発表するわけにはいかないから王敬軒をでっち上げた。私は、これを指して捏造論文、あるいは捏造書簡と表現している。普通に考えて正々堂々と胸を張って言明できる種類の文章ではありえない。事実、錢玄同は、王敬軒が自分であると公的に認めたことはないのだ。ただし、のちの中国現代文学史では、称賛すべき行為だという評価で一致している。後世の研究者は当事者ではないから当たり前にもせよ、捏造論文だという後ろめたさは、誰も感じていない(別稿参照)。

錢玄同と劉半農は、守旧派を挑発することを目的にして文章を書いた。事前に打ち合わせている。具体的に批判をするために守旧派の代表者として林紘を特に指名した。王敬軒(錢玄同)は、林紘を「現代の文豪[当代文豪]」と持ち上げてみせる。示した作品のひとつが漢訳の『吟辺燕語』だった。

劉半農は、それに反論する。林紘がそれまで行なっていた外国文学の翻訳という仕事を批判して、価値がないという。林紘らが翻訳した『吟辺燕語』について、劉は何をいったか。

本来はイギリスの戯曲だが、林紘は「詩」と「戯」を識別していない、と劉半農は批判した。

その意味は次のようになる。すなわち、『吟辺燕語』は、シェイクスピア(英国莎士比)著と示してあるにもかかわらず、漢訳を見ればそれが小説体である。ゆえに、もとのシェイクスピア戯曲を勝手に改変したと断定した。「豆と麦の区別もつかない」と常套句を使って林紘を罵る。いうまでもなく、戯曲と小説の区別がつかないという意味だ(以下、「区別がつかない」論と略称)。それほどに林紘は無知蒙昧、愚昧だと批判する。

ところが、この林訳が底本としたのは、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』であ

る。戯曲が書き換えられてすでに小説になっている。小説化された原作をそのまま翻訳して『吟辺燕語』が成ったというだけのことだ。林紘が小説体であるのは当然のこと。非難される理由にはならない。

劉半農が、その事実を知らずに林紘を批判する根拠としたのは、どう考えても軽率だった。事前に銭玄同と相談しているから銭もおなじだ。林紘は、原作者を表示してシェイクスピアだとしている。しかし、林紘はラム姉弟の名前をだしていない。これらがからまって非難のうまれる原因であった、ということ是可以する。だが、おかしいことだと私は思う。劉半農の間違いを指摘する人がいない。文学革命派を批判することは、中国においては現在も許されないのだろう。

それとは別に生じる不可解なことは、ラム原作に関する劉半農らの理解なのである。

『吟辺燕語』の刊行は1904年だ。劉が林紘批判の根拠として該作品をあげたのは、1918年のことだった。14年後である。14年という時間は長すぎはしないか。ラム姉弟の原作であることをその間ずっと劉半農は知らなかったのか。

劉は、翻訳家だし当時は北京大学法科預科教授でもある。その彼がラムについて無知であったとは、信じがたい。だいいちラムの原作だと明記している『滬外奇譚』が1903年に刊行されているではないか。それにも気づかなかったのか。

知っていたのであれば、劉半農は、わざと無視した。林紘がラム版を底本に使ったとはわかっていたが、ラムの名前を出していないことを逆手にとった。劉半農は、それを林紘がシェイクスピアとラムの区別がつかない根拠とした。そうであれば、劉は確信犯だ。そこがはっきりしない。

見る人がみれば、『吟辺燕語』の原作がなにであるかは容易に理解する。ラムの名前がなかろうが、知っている人は知っているのだ。しかも、はるか以前に。それを証明する事実がある。中国に知識人は多い。

『吟辺燕語』の原作

呉宓(1894-1978)は、1911年当時数えで十八歳の学生である。日記の「自修課程」に「Tales from Shakespeare “Tempest”」と記入し、さらに「商務印書館説部叢書の『英国詩人吟辺燕語』は、たぶんこの書を翻訳したものだろう」*2と書いている。

呉宓は、自分の日記にそう記しただけで公表するわけではない。だから、劉半農

が『吟辺燕語』の原作をラム姉弟の小説本だと気づかなかつたのはしかたがなかった、とはならない。なぜなら、シェイクスピア戯曲について評論文が別に書かれており、林訳『吟辺燕語』を紹介しているからだ。こちらも、劉半農の文章より早く公表されている。

東潤「莎氏楽府談」全4章（『太平洋』第1巻第5、6、8、9号1917.7.15、8.15、11.15、1918.1）である。東潤は朱世溱（1896-1988。武漢大学のちに復旦大学教授*3）のこと。呉宓よりもさらに若い。

表題の「莎氏」はシェイクスピアを、「楽府」は戯曲を、「談」は評論を意味する。

朱東潤は、シェイクスピア戯曲を紹介するこの長編評論のなかで次のように書いている。

のちにラム氏がそのあらましを述べて『シェイクスピア物語』とした。わが国の林琴南がそれを翻訳して『吟辺燕語』と称している〔後有林氏述其事迹為莎氏楽府本事。吾国林琴南訳之。則稱為吟辺燕語〕。1:2頁

林氏の『吟辺燕語』は、イギリス人ラムの『シェイクスピア物語』という原書から翻訳したものだ〔林氏吟辺燕語訳自英人林穆之莎氏楽府本事原書〕。

2:1頁

「莎氏楽府」は、シェイクスピア戯曲を指している。「本事」とは、辞書的にいえばもとの事跡、事柄を意味する。物語と考えればよい。ここで使われている「莎氏楽府本事」は、すなわちラムの『シェイクスピア物語』である。

朱東潤論文は、1917年に発表された。1918年の劉半農によるいわゆる「なれあい芝居」「自作自演の論争」よりも前に読むことのできる文章なのだ。

劉半農らは、そのことを知らなかったのか。それとも知らぬ顔をしたか。どうしても話がそこに行く。

もし、わざと無視したのであれば、なにがなんでも林紘を引っ張り出して批判の矢面に立たせたかった、ということだ。事実、そうなった。林訳は、シェイクスピア戯曲を勝手に小説化して翻訳した。多くの研究者たちはそう書いて林紘の無知を物笑いにし続ける。劉半農の誤りを指摘して林紘が冤罪であることをいう研究者は、私を除いて今にいたるまで出現していない。

いうまでもなく、劉半農の林訳批判は、間違った根拠のうえに構築されている。『吟辺燕語』を論拠にした劉の林訳批判は、本来が正しくない。ゆえに、それから6年後の鄭振鐸は、そのことにわざと触れない。

鄭は、『吟辺燕語』をあげるかぎり林訳批判が成立しないことを理解していたと思われる。彼は、「却爾斯、蘭為吟辺燕語 (Tales from Shakespeare)」と説明してラムと原作を明記し、自分の論文では別の場所に移動させた。これがその証拠だ。

鄭振鐸は、そのかわりになにをしたか。鄭はそ知らぬ顔をし、ひとことの説明も訂正もせず『吟辺燕語』をおろし「凱徹遺事 (ジュリアス・シーザー)」など別の林訳シェイクスピア作品にすり替えた。さらに林訳イブセンを掲げる。林訳は原文のすばらしさと風格および重要な対話を完全に消滅させ、まったく別の本にかえてしまった、と批判するのだ。さらに、林訳は小説と戯曲の区別がつかない、と書いて鄭振鐸は林を罵る(「区別がつかない」論である。後述)。驚くほかはない。これを巧妙といわずして何といえがいいのか。その手際があまりにもあざやかだから、私は感心するたびに同じことが書きたくなり、今もそうしている。今後もそうするだろう。

鄭振鐸が行なった指摘、すなわち「区別がつかない」論は、のちの研究者によって広く認められ支持された。認められた、といっても検証を経ているわけではない。内容を検討した結果、鄭の説に賛成すると書いた研究者はいないのだ。だから、皆は、なにも調べずなにも知らないまま鄭の断定を受け入れた、といわざるをえない。無責任といえれば書きすぎか。ともかくその結果、現在も林訳は批判されつづけている。シェイクスピア戯曲を小説化し、戯曲と小説の「区別がつかない」というのが、その大きな理由のひとつだ。

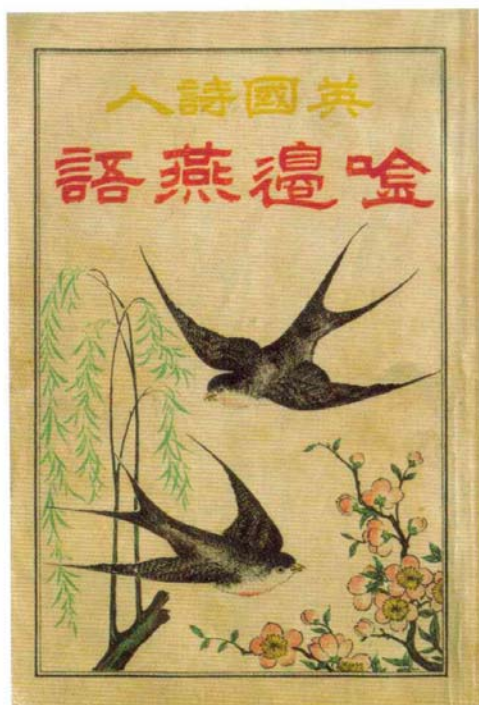
しかし、その批判には根拠がない。英文小説化本が存在していたのだ。林訳らは、それを底本にして漢訳しただけ。鄭振鐸は林訳に濡れ衣をきせた。これが冤罪事件であることは、明白な事実だ。

以上が、阿英が文章を書く前に発生している事柄である。

『吟辺燕語』のこと

『吟辺燕語』の諸版について簡単にのべる。

説部叢書に収録された版本がもとになる。以下のとおり。



『英国詩人吟邊燕語』説部叢書の表記がない(刊年不明。実物未見)。上海図書館編『中国近現代話劇図誌』(上海科学技术文献出版社2008.1)所収。戈宝権の論文「莎士比亚的作品在中国」にも書影が掲げられる。ほかの版本は、『林紓冤罪事件簿』195頁に書影をかかげた。

『吟邊燕語』 英国莎士比著 林紓、魏易同訳 上海・中国商務印書館 説部叢書第一集第八編 光緒三十(1904)年七月首版 / 光緒三十二(1906)年四月三版

シェイクスピアの名前だけがある。ラム姉弟の姿は、ない。問題が発生する原因である。

目次と本文には「英国詩人吟邊燕語」と表示される。また「吟」についても表紙は「唸」であるが、本稿では『吟邊燕語』を使用する。

表紙に「神怪小説」とつけ加えられるのは、改組された説部叢書初集以降だ。日本語でいえば「幻想小説」である。中国の研究者のなかには、該訳書が「神怪小説」と称したことをあたかも誤読したかのようという人がいる。なにか先入観があるのではないか。私は林紓が誤読したとは思わない。亡霊、幽霊、妖精が出現する作品もある。角書をつけたのが林紓でなければ、版元の商務印書館になるが、幻想小説だと考えたのは不思議ではないのだ。

当時の新聞『中外日報』に上海商務印書館が出版した新書広告が掲載されている。「説部叢書」を大書し、『案中案』『環遊月球』とともに『吟邊燕語』を説明しているなのでその部分を引用する。

『中外日報』光緒三十年八月十三日（1904.9.22）（記号は樽本がつけた）
説部叢書 / 英国詩人吟辺燕語 / 閩中林琴南先生善訳小説膾炙人口毋待贅言。今
又訳英詩人莎士比筆記。莎為歐洲詩聖其所著述梨園演唱至今勿衰。此為其詩之
紀事二凡十則。先生一一為製新名。其目如下。肉券、馴悍、變悞[誤]、鏑情、
仇金、神合、蠱微、医諧、獄配、鬼詔、環証、女變、林集、礼関[哄]、仙猶、
珠還、黒瞽、婚詭、情感、颺引。洋装一冊。售價大洋三角五分。

林紓が「イギリス戯曲家シェイクスピア物語 [英詩人莎士比筆記]」を翻訳した。
シェイクスピアは、ヨーロッパのすぐれた戯曲家 [詩聖] でありその著述は梨園で
演じられ今に至るまで衰えない。該書は、その戯曲 [詩] の物語 [紀事] 20則で
ある、などなど。

原文の「詩人」は今でいう戯曲家だ。ここに見える「紀事」は、「筆記」「記
事」と書いても同じ。物語を意味する。戯曲をもとにして書かれた物語だから『シ
ェイクスピア物語』にほからならない。林紓の「序」に基づいて作られた広告文だ
とわかる。

この広告を読んだ一般読者は、ラム姉弟の原作であるとは理解しないだろう。シ
ェイクスピアは出てくるが、ラムの名前がないからだ。シェイクスピアの作品その
ものだと誤解してもしょうがない。これはあくまでも読者の側の問題である。林紓
とは関係がないことにご注意いただきたい。

2日後の『中外日報』光緒三十年八月十五日（1904.9.24）に受贈書籍の記事が掲
載されている。上記の広告と内容はほとんど同じだが、出版記録資料として引用す
る。

恵書誌謝 昨承商務印書館惠贈新印説部叢書第一集第八編。英国詩人吟辺燕語
一冊。按是書為英詩聖荷^マ[莎]士比筆記。凡二十則。情節奇幻。歐洲各国皆演
為伝奇。風行遐邇。訳者為閩中林君琴南。林君素以訳小説著名。則是書之声價。
不待言矣。書此鳴謝。

「説部叢書」は、最初第一-十集と称していた。のちに改組されて初集という呼
称に変更されている。『吟辺燕語』はこれにも組み込まれ、のちには「林訳小説叢

書」に収録された。

上海・商務印書館 説部叢書初集第8編 甲辰(1904)年十月初版 / 1913.6四版
上海・商務印書館 林訳小説叢書第1編 1914.6

本文は、以上の3種類ともに同一である。組版がまったく同じだから紙型を使用したと理解する。初集第8編では初版を「十月」としている。もとの「七月」とは異なる。重版の際に記述がぶれたらしい。「説部叢書」ではよくあることだ。

そのほか、小本小説版、国難後版などという形で出版されたという(未見)。

のちに阿英編『晚清文学叢鈔』域外文学訳文巻(北京・中華書局1961.9)に収録されている。

ただし、阿英は「(英)蘭姆^{ラム}著 林紓魏易同訳」と書いて著者名の表示を変えた。つまり、原書の「英国莎士比著」を独自の判断で削除してしまったのだ。なぜこういう勝手なことをするのだろうか。研究者であれば、ここは注をつけるべき箇所である。だが、阿英は、そうしていない。勝手な改変が、のちの誤解を生む原因になる。

記載がそのように変化したのは、阿英「晚清小説目」(『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8 / 増補版 上海・古典文学出版社1957.9、北京・中華書局1959.5。124頁)にさかのぼる。この阿英目録から「英国莎士比著」がなくなり、「蘭姆」に変更された。阿英にしてみれば、ラムを表示するほうが正確であると考えたのだろう。しかし、実物には存在しないこの記述は不正確である、といわなければならない。

ここでも誤記のはじまりは、阿英だ。

阿英の「晚清小説目」は、長年にわたって研究者に利用され続けてきた。もとの目録が誤っていれば、誤解が訂正されないままになるのもしかたがない。なにしろ清末小説資料については、利用できるものは限られていると信じられてきたからだ。阿英が整理した資料に依拠せざるをえなかった。

『吟辺燕語』は、1981年に「林訳小説叢書」10種の1冊として北京・商務印書館から復刻刊行される。ここでも「蘭姆」だけがあって、シェイクスピアはない。表紙、扉、奥付(英文併記)のすべてが「[英]蘭姆著」と書かれている。原本の記載とは異なった説明が行なわれた。また、『中国近代文学大系』11集28巻翻訳文学集三(上海書店1991.4)に採録されたのは、全20篇のうちの3篇だ。同じく「蘭

姆」とだけ表示する。

林訳では存在しなかったラムが表にでてくるのは、阿英目録の記述からはじまった。彼に権威があることを私たちに見せつけている。その例のひとつだ。

気の毒にも、1981年復刻版の誤った記述を鵜呑みにした研究者がいる。

莊浩然は、「閩籍近代学者与莎士比亚」（『福建師範大学学报（哲学社会科学版）』2005年第3期（総第132期）2005.5.28）において、次のように説明する。

「林訳本は、ラム氏ふたりの『シェイクスピア物語 [“ Tales from Shakespeare (莎氏楽府本事) ”]』を翻訳したと明記し」（74頁）ている、と。

瀨外版の訳者がラム版との区別をつけていないと罵り、それと対比させて林紘が正確に記述しているとほめてきわだたせたつもりだ。だが、林訳には、もともとラムの名前は掲載されていない。莊浩然は、1981年復刻版の記載によっている。

『吟辺燕語』の実物を見ずに論文を書いた。実物にはラムを明記していないことを知らなかった。莊は林紘を擁護するために該文を書いたが、結果としてそうはならない。立論を急ぐあまり資料の吟味まで手が回らなかったとみえる。

収録作品の林訳名と原題、日本語訳を以下に示す。印は、『瀨外奇譚』に収録された作品だ（翻訳題名は異なる。別稿で示す）。この先行漢訳は原書の半分しか翻訳していない。しかし、林訳は全訳である。題名を漢字2字に統一したのも工夫のひとつだ。

肉券	The Merchant of Venice	ヴェニスの商人
馴悍	The Taming of the Shrew	じゃじゃ馬ならし
學誤	The Comedy of Errors	まちがいの喜劇
鑄情	Romeo and Juliet	ロミオとジュリエット
仇金	Timon of Athens	アテネのタイモン
神合	Pericles, Prince of Tyre	ペリクリーズ
蠱徴	Macbeth	マクベス
医諧	All's Well that Ends Well	終わりよければすべてよし
獄配	Measure for Measure	尺には尺を
鬼詔	Hamlet, Prince of Denmark	ハムレット
環証	Cymbeline	シンベリン
女変	King Lear	リア王

林集 As You Like It	お気に召すまま
礼哄 Much Ado about Nothing	から騒ぎ
仙猶 A Midsummer Night's Dream	真夏の夜の夢
珠還 The Winter's Tale	冬の夜ばなし
黒瞽 Othello	オセロー
婚詭 Twelfth Night; or, What you Will	十二夜
情感 The Two Gentlemen of Verona	ヴェローナの二紳士
颯引 The Tempest	あらし

林訳には、ラムの「序 PREFACE」は漢訳されていない。

ラム序を翻訳掲載しなかったから彼の存在がわからなくなってしまった。中国の読者にとっては、そうだ。だが、林紘自身は、ラムの原作であることは知っていた。底本はラム版なのだからラムが著者であるのは当然だろう。しかも、ラム版書名の意味は「シェイクスピア作品にもとづく物語」なのだ。共訳者の魏易から解説があったと考えるのが普通である。

また、1冊20作品のすべてを翻訳しながら、「序」があることに気づかなかったとは考えられない。いくら共同翻訳者の魏易が原文を握っていようが、原書にある「序」について解説がなかったわけでもなかろう。クイラー＝クーチ『シェイクスピア歴史物語』を林紘が漢訳したときと同じことである。林紘は、その「序」を掲げなかった。示したのは、「英国莎士比原著」である。クイラー＝クーチの名前をださなかった。

林紘は、シェイクスピア戯曲からラムの著作が作られたことを理解している。普通に考えれば当たり前のことだ。ただ、彼はラムの名前を出さなかった。

ところが、林紘に対する先入観があるのだろう、彼は無知だと主張する研究者がいる。林紘の「序」（以下、林序と略称）が問題になるのである。

林序について

林紘は誤解をしていると説明し、その結果として林を罵るのが、謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史（1898-1949）』（上海外語教育出版社2004.9）だ。

謝天振らのいうところを紹介する。

チャールズ・ラム姉弟の『シェイクスピア物語』を底本にし、シェイクスピアの原著を翻訳の底本にしなかったのは、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』はシェイクスピアの戯曲物語にもとづいて書き換えたことを林紘が知らず、シェイクスピア詩歌創作の「もとの事柄」だと考えたからだ[以為是莎氏詩歌創作的“本事”]。271頁

謝天振らは、引用符号を使用して「本事」だと書いている。しかし、林序において「筆記」「記事」「紀事」という単語は使われているが「本事」は見当たらない。謝天振らは、原文を厳密に読んではいないとわかる。

「シェイクスピアの戯曲物語にもとづいて書き換えた」と日本語訳をつけた部分の漢語原文はつぎのとおり。「……是根拠莎氏戲劇故事改写的」。「莎氏戲劇」ならまだ理解できる。ラムが「シェイクスピア戯曲にもとづいて」書き換えたのは事実だ。だが、「莎氏戲劇故事(シェイクスピアの戯曲物語)」となるとなにを指しているのかわからない。しいて言えば『シェイクスピア物語』だ。そうすると、「ラム姉弟の『シェイクスピア物語』は『シェイクスピア物語』にもとづいて書き換えた」、とならざるをえない。説明になっていないのだ。彼らの勘違い、あるいは誤植だろう。

ラムの著作が先にあり、そこからシェイクスピアが詩作した(つまり劇化した)。謝天振らによると、林紘はそう考えていた。だから、制作の順序が逆だ、と謝らは非難する。無知な林紘だ、そんなことも知らないのか、と。「林紘は『瀕外奇譚』の訳者と同じく、シェイクスピアの生涯と、創作について本当に理解しているわけでは決してない」(同上)と記述しているところからも明らかだ。林訳に先行する『瀕外奇譚』の訳者とあわせて林紘を罵倒している。

これを読んで、私はおかしい説明だと思う。

謝天振らの記述をつきつめれば、シェイクスピア戯曲よりも前にラムが存在していることになる。ラム『シェイクスピア物語』にもとづいてシェイクスピアが劇化したと林紘は誤解していた。謝らは、そう主張するのだ。

よく見てほしい。書名からして変な関係になるではないか。シェイクスピアが、自分の名前を冠した書物にもとづいて戯曲化した。まさか。普通に考えてありえない。中国の知識人林紘が、そのように誤解するだろうか。なにか別に根拠がなければ、謝らの説明にはならないはずだ(伏線1)。

博其趣。此東坡所謂久醫膏粱。反思螺蛤者也。蓋政教兩事。與文章無屬。政教既美。宜澤以文章。文章徒美。無益於政教。故西人惟政教是務。膽國利兵外侮。不乘始以餘閒用文章家娛悅其心目。雖哈氏莎氏思想之舊。神怪之託。而文明之士。坦然不以爲病也。余老矣。既無哈氏之通涉特喜。譯哈氏之書。摯友仁和魏君春叔。年少英博。淹通西文。長沙張尙書既領。譯事於京師。余與魏君適厠譯席。魏君口述。余則叙致爲文章。計二年以來。予二人所分譯者。得三四種。拿破崙本紀爲最。鉅本。秋初可以畢業。矣。夜中餘閒。魏君偶舉莎士比筆記一二則。余就燈起草。積二十日。書成。其文均莎詩之記事也。嗟夫。英人固以新爲政者也。而不廢莎氏之詩。余今譯莎詩紀事。或不爲吾國新學家之所屏乎。莎詩紀事。傳本至夥。互校頗有同異。且有去取。此本所收。僅二十則。余一一製爲新名。以標其目。

光緒三十年五月閩縣林紓序

歐人之傾我國也。必曰識見局。思想舊。泥古駭今。好言神怪。因之日就淪弱。漸即頽運。而吾國少年強濟之士。遂一力求新。醜詆其故老。放棄其前。載惟新之從。余謂從之誠是也。顧必謂西人之夙行夙言。悉新於中國者。則亦譽人增其義。毀人益其惡耳。英文家之哈葛得。詩家之莎士比。非文明大國英特之士耶。顧吾嘗譯哈氏之書矣。禁蛇役鬼。祟累而見。莎氏之詩。直抗吾國之杜甫。乃立義遺詞。往往託象於神怪。西人而果文明。則宜焚棄禁絕。不令流世。知識然證以吾之所聞。彼中名輩。就莎氏之詩者。家絃戶誦。而又不已。則付之梨園。用爲院本。士女聯襖而聽。歡感涕。竟無一斥爲思想之舊。而怒其好言神怪者。又何以故。夫彝鼎罇彝。古綠斑駁。且復累重。此至不適於用者也。而名閭望胃。毋吝千金。必欲得而陳之。亦以羅綺絮紵。生事所宜有者。已備足。而無所顧戀。於是追躡古踪。用以自

『吟辺燕語』林序

謝天振らがそう主張するひとつの根拠は、『吟辺燕語』につけられた林序である。

関係部分を検討する*4。

林序は、ふたつの部分にわかれる。前半は、シェイクスピア戯曲について説明し、後半はラム『シェイクスピア物語』について記述する。ご注意いただきたい。この簡単な事実に気づかない研究者がいるとすれば、その人はまじめに林序を読んでいないことになる。末尾に「光緒三十年五月閩縣林紓序」とある。

林序の冒頭は、こうだ。

西洋人が中国を軽んじて、思想が古く神仙妖怪のことを好んで話すから日増しに頽廢に向かったという。しかし、「イギリスの文学家〔文家〕ハガード、「詩家」シェイクスピアは、文明大国の傑出した人物ではないのか」。そのふたりは、迷信行為、神仙妖怪に多く言及している。それにもかかわらず、彼らの作品は好まれており、誰も思想が古いなどとはいわない、という話の運びになる。

原文「詩家」は、今はカッコをつけて原文のままにしておく。ここが理解の分か

れ目だからだ。字面を見てそのまま「詩人」と考える人がいても不思議ではない。不思議ではないどころか、ほとんどの研究者がそうである。私が先走って説明すると、この「詩」を今の詩だと考えると間違う。

問題は、つぎの箇所だ。

かれら西洋人のなかの名望をもつ年輩者でシェイクスピアの「詩」をとくに好む者は、どこの家でもだれもが朗誦し、しかもそれで終わらず劇場にかけて用いて脚本とした〔彼中名輩。耽莎氏之詩者。家弦戸誦。而又不已。則付之梨園。用為院本〕。

原文の「莎氏之詩」はそのままに「シェイクスピアの詩」と訳しておいた。

これと前部分の「詩家」とあわせ考えると、シェイクスピアの詩がのちに戯曲となったように読める。ゆえに、劉半農の判断になる。つまり、林紘は「詩」と「戯曲〔戯〕」を識別していない、と。劉半農は、その「詩」を書いてあるままの詩だと考えた。なんの疑問も感じなかったのだ。それが現在にまで影響をおよぼしている。林紘はシェイクスピア劇の制作過程についてなにも知らない。謝天振らは、そう判断した。

だが、「莎氏之詩」は「シェイクスピアの戯曲」が本来の意味だ。私は、その解釈しかないと考えている（後述）。上の部分は、シェイクスピア劇曲が家庭から劇場に普及したように書いているだけだ。

ラムはその序において、シェイクスピア劇曲がどのようにできたのかを説明していない。その成立について林紘に解説した人は、共訳者の魏易であった可能性が高い。シェイクスピア劇は、昔のイギリスにおいてなによりも芝居として歓迎された。わざわざいうまでもない。脚本が印刷物になるのは、かなり後のことだ。ゆえに、上に見るように家庭から劇場というのは伝播の方向としては逆になる。魏易でなければ林紘の誤解であろう。

私は次のように考える。上に引用した原文「詩家」には、日本語に翻訳するとすれば「戯曲家」を当てなければならない。無韻詩によって戯曲が書かれているのだからそうだ。つまり、ここでいう「詩」が示しているのは、戯曲にほかならない。伝播の方向が違うだけのこと。当時の観客から歓迎されていたことをいっているにすぎない。

だいいち、林序のこの部分はラムの小説化本とは無関係である。シェイクスピア戯曲について述べているだけだ。それを謝天振らはむりやりラムと関連づけて制作の順序が逆だと批判する。そのようなことは、ここには書かれていない。にもかかわらず関係するように受け取ったのには、もとづいた別の何かがあるはずだ（伏線2）。

つづけて林紓は、共訳者の魏易に言及する。翻訳過程を説明したとして広く知られている箇所だ。ここに登場するのがラム『シェイクスピア物語』である。林序の後半になる。

京師大学堂（のちの北京大学）において林と魏のふたりは知りあった。共同作業がはじまる。魏が口述翻訳し、林が筆記する。2年で3、4種ができた。『拿破侖^{ナポレオン}本紀』が最も巨冊でこの秋には終りそうだ。

夜のあいた時に、魏君が『シェイクスピア物語』のひとつふたつを差し出した。私は灯火に身をよせ書きはじめ、20日にして書が成った。それらはすべてシェイクスピア戯曲の物語である〔夜中餘閑。魏君偶拳莎士比筆記一二則。余就灯起草。積二十日書成。其文均莎詩之^{ママ}記事也〕。

林訳について、意図して誤解するものがいくつかある。そのひとつは、林紓らがまるで偶然のように作品を選んで漢訳したと受け取る人がいる。上記引用部分が、その根拠になったと推測される。

鄭振鐸は「林琴南先生」（『小説月報』第15巻第11号1924.11.10）において次のように書く。「彼らはただ随意に、1冊の本をとりあげてちょっと読み「この本は内容がよい」と感じるとすぐさま口述翻訳をして林氏に聞かせ、林氏はそのまま筆記したということにすぎない」

鄭振鐸は、『吟辺燕語』林序に出てくるわずかな部分にもとづき、それを拡大解釈して林訳全体の評価をおとしめるのに利用した。

林序文中の「莎士比筆記」「莎詩之記事」を見てほしい。前者は『シェイクスピア物語』だ。後者の「莎詩」はシェイクスピアの戯曲であり、その「記事」は物語を意味する。表記は異なるが、こちらも『シェイクスピア物語』なのである。20作品を20日で漢訳したのであれば、1日1作品という勘定になる。翻訳する速度は、相当にはやいということができよう。20作品という数も『シェイクスピア物

語』そのものだ。ラムの小説化本である。

ところが、林紘は上につづけてこう述べる。

ああ、イギリス人は新しいことで政治を行なっているが、しかしシェイクスピアの戯曲を捨ててはいない。私が今『シェイクスピア物語』を翻訳するのは、わが国の新学家も排斥しないだろう [嗟夫。英人固以新為政者也。而不廢莎氏之詩。余今訳莎詩紀事。或不為吾国新学家之所屏乎]。

林紘は、シェイクスピアの戯曲といいながら『シェイクスピア物語』を翻訳すると書いた。ここが誤解を生むもうひとつの原因である。

研究の権威である阿英は、この部分をつかまえた。ここを根拠にして阿英はどう説明したか。

阿英の林紘批判　　もうひとつの冤罪事件

阿英「翻訳史話」第4回（『小説四談』上海古籍出版社1981.12。該文の執筆は「1938年」）である。

林紘が20日で訳し終えたことを訳筆旺盛だと阿英は称賛する。それは、よい。問題となる阿英の文章はその次だ。

しかし原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し、これは達文本が「絶世の名優」としたのに匹敵する。だが、この責任は魏易にあり、林氏はもとより知ることではできなかった [但誤原本為《沙氏筆記》，与達文本之《絶世名優》，可為匹対，不過，此責任在魏易，林氏初不能知也]。244頁

うしる部分の「達文本が「絶世の名優」とした」とは、ラム版最初の漢訳『瀕外奇譚』の「叙例」に説明して「絶世名優」とあることを指す。阿英は、名優について誤りだと思いこんでいる。しかし、シェイクスピアが俳優を兼ねた座付き作家であったことは事実だ。阿英がそれを知らなかっただけのこと。『瀕外奇譚』の訳者は、誤解もしていないし誤記もしていない。批判する阿英の方に知識がなかった。

私が注目するのは、その前の部分だ。原文の漢字にしてわずかに8文字。だが、文字数に関係なく、これこそが重要である。のちの研究者に大きな影響をあたえる

ことになるからだ。

阿英がいうには、林紓は「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し〔誤原本為《沙氏筆記》〕」ていた。これはどういう意味か。

「誤解し」だから、林紓は間違っ理解していたことになる。林紓は、なにをどう誤解したのか。

林紓は、シェイクスピアの戯曲がラムの『シェイクスピア物語〔沙氏筆記〕』だと誤解していた。

阿英がそう判断する根拠は、まさに林序の上記部分にある。シェイクスピア戯曲だといいいながら『シェイクスピア物語』を翻訳する、というあの箇所だ。

阿英説に従い、私が補足説明すれば、林紓はシェイクスピア戯曲そのものを知らない、ということになる。シェイクスピア戯曲を知らないとは、林紓は戯曲そのものを読んだことがない、といっているのと同じことだ。周知のとおり林紓は外国語ができなかった。ここの「読んだことがない」とは、共訳者がシェイクスピア戯曲を口述翻訳したのを聞いたことがないという意味である。

林紓は「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し」ていた。阿英がそう考えるにいたった背景には、どのような評論の流れがあるのか。もういちど思い出してほしい。

劉半農が錢玄同と一緒に口火を切り、鄭振鐸がそれを発展させ、林紓は戯曲を小説体になおして翻訳した、と批判した。林紓は戯曲と小説の「区別がつかない」という論を提出し定着させた人物は、劉半農と鄭振鐸のふたりなのである。

阿英は、劉鄭の林訳批判を受け入れた。これがひとつ。もうひとつは、林序にシェイクスピアはあってもラム姉弟の名前がない。林紓が説明をしていないことが理由になる。

阿英の考えによると、ラム『シェイクスピア物語』そのものがシェイクスピアの作品だと林紓は誤解していた。こうなると、阿英は劉半農、鄭振鐸らよりも林紓を痛罵してその程度をさらに強めている。

謝天振らは、阿英が述べるこの漢字8文字にとびついた。

彼らが根拠としたのは、阿英によるこの指摘にほかならない。しかし、そのままを取り入れず、ラム作品からシェイクスピアが戯曲化したと補足したつもりだ。それではかえって説得力のない説明になってしまった。だからこそ、林紓は何も知らないという罵りを強調することにつながる。

そう考えるのは、謝天振らだけではない。

韓洪拳もその著書『林紘小説研究 兼論林紘自撰小説与伝奇』（北京・中国社会科学出版社2005.7。125頁）において次のように書いている。「ラム姉弟がシェイクスピア戯曲にもとづいて書き換えた散文物語（Tales from Shakespear^{ママ}）をシェイクスピアの作品だと誤解していた」

「ママ」とつけたが、ラム版初版本にはそういう綴りが使っているので誤りではない。だが、林紘が誤解をしていたという箇所は、阿英の記述をそのまま受け入れてくり返しているだけ。この最近の専門書でも阿英の説明が正しいと認めている。すなわち、林紘はシェイクスピア戯曲について無知である、という。韓洪拳も阿英説を支持し、結局のところ「区別がつかない」論を承認して林紘を批判しているのだ。

これほど長年にわたって林紘非難が継承されている。その根が深い。

はたして、林紘はシェイクスピア戯曲それ自体を知らなかったのか。林紘らは、シェイクスピア戯曲そのものを見たことがあるのかないのか。これが問題の焦点である。

その答えは簡単だ。

林紘らは、シェイクスピア戯曲を読んでいた。林紘についていえば、共訳者が翻訳するのを聞いていたという意味だ。

林紘らが漢訳した「十二夜〔婚詭〕」を見れば、シェイクスピアの原作を知らなければ書けない部分が存在している（別稿参照）。林訳「ジュリアス・シーザー〔凱徹遺事〕」でいえば、全体の3分の2はシェイクスピア戯曲そのままである（別稿参照）。

阿英の指摘は間違っている。彼も林紘に濡れ衣を着せたから、これは阿英がつくりだしたもうひとつの冤罪事件である。これも私のいう「阿英問題」のひとつになる。

林紘は、戯曲と小説が別物であることを認識しながら、シェイクスピアという名前で一括りにしたにすぎない。これについてもう少し説明を続ける。

戯曲と小説

すでに触れた林序の前部分に「莎氏之詩」とある。これは、シェイクスピアの戯曲を意味している。

上に見た朱東潤の文章では「莎氏楽府本事」と表示される。これは林紘の表記でいうと「莎詩紀事」に該当する。いうまでもなく「莎」は「莎氏」に、「詩」は「楽府」に、「紀事」は「本事」にそれぞれ対応している。

『吟辺燕語』の林序にでてくる関連語句を列挙し、日本語訳をつけておく。原文の「詩」は戯曲に置き換えるのが正しい。

詩家之莎士比	戯曲家のシェイクスピア
莎氏之詩	シェイクスピアの戯曲
莎士比筆記	『シェイクスピア物語』
莎詩之記事	シェイクスピア戯曲の物語、すなわち『シェイクスピア物語』
莎詩紀事	シェイクスピア戯曲物語、すなわち『シェイクスピア物語』

これを見れば、林紘は、シェイクスピアの戯曲とラム『シェイクスピア物語』を厳密に分けていることがわかる。かりに、シェイクスピア戯曲について林紘が無知であるとすれば、このように書き分ける必然性がない。

阿英が「原本が『シェイクスピア物語』だと誤解し[誤原本為《沙氏筆記》]」と断定した根拠をもういちど思いだしてほしい。林紘はシェイクスピア戯曲と並べて『シェイクスピア物語』を置いた。両者の関係について書いていない。これにつける。説明していないから、林紘が誤解しているという阿英の判定になった。だが、説明していないことは、知らないことを意味するわけではないのだ。

林序と同じ表現が、林紘より前に登場していることを指摘したい。

さきにあげた『澠外奇譚』である。『吟辺燕語』よりも1年早く刊行されていることは述べた。

その「叙例」*5冒頭で、該書の著者はシェイクスピアだと書く。しかも、以下のように説明する。関係部分のみを引用する。

しかし、わが国の最近の学界では、戯曲[詩詞小説]についていう人はいつもシェイクスピア氏を称賛するのだが、その書はこれまで読むことができなかった。私はそれをひそかに残念に思っていた。そこで本書をただちに翻訳し、小説界に異彩を添えようと思う[而吾国近今学界，言詩詞小説者，亦輒嘖嘖称索氏，然其書向未得讀，僕竊恨之，因亟訳述是編，冀為小説界上增一異彩]。

317頁

『澥外奇譚』を漢訳した氏名不詳の人物は、シェイクスピア戯曲について述べているにもかかわらず、翻訳して小説界に投じるといふのだ。すなわち、翻訳したのはラム姉弟の『シェイクスピア物語』である。

上の部分だけを読むと、その訳者には戯曲と小説の区別がついていない印象を受ける可能性がある。

原因のひとつは、原文の「詩詞小説」だ。現代の研究者は、これを見ると小説だと考えるらしい。使用されている語句の意味を詮索しない。だから、シェイクスピアが小説を書いたと受け取る。シェイクスピアが小説を書いた事実はない。ゆえに、そのように説明する訳者が間違っている、知識がない、となる。もうひとつは、翻訳が小説体だから、シェイクスピアとラムの区別がついていないという。

そのように説明する研究者があとをたたない。

だが、『澥外奇譚』の訳者がつづけて書いているところに注目してほしい。

本書は、もとは戯曲体であり、イギリスの学者ラムが散文になおし題名を『シェイクスピア物語』という。ここに最もよいもの10章を選び翻訳して以下の題名にする〔是書原系詩体，経英儒蘭ト行以散文，定名曰《Tales From Shakespeare》，茲選訳其最佳者十章，命以今名〕。317頁

シェイクスピア戯曲からラムの『シェイクスピア物語』が作成されたと明解に説明している。佚名訳者は混同してはいない。シェイクスピア戯曲を話題にしたあとにつづけて、関連あるものとして「(シェイクスピア戯曲にもとづいた)本書(シェイクスピア物語)を翻訳し」となったのである。

かの訳者は、事情を知ったうえでシェイクスピア戯曲に言及し『シェイクスピア物語』を掲げた。両者が別物であることをわかっている。ただ、シェイクスピアの名前でくくっただけ。

林紓も同じことだ。ラムの小説化本ができた経緯を理解したうえで、その説明をしなかったにすぎない。

林紓が『澥外奇譚』を読んでいたかどうかは不明だ。その箇所の説明について偶然の一致なのかどうか、判断できる資料を私は持たない。

シェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』を一括りにした例をもうひとつあげよう。紅樓夢評論、戯曲史研究でも有名な王国維だ。

王国維「シェイクスピア伝〔莎士比伝〕」（『教育世界』第159号1907.10初出未見。姚淦銘、王燕編『王国維文集』第3巻北京・中国文史出版社1997.5。392-397頁）である。

王国維の該文は、林紓らの『吟辺燕語』より公表された年は遅い。だが、1907年というかなり早い時期の研究論文だ。林紓とほとんど同時期だといってよい。しかも、比較的詳しい伝記である。王国維が書いたシェイクスピア伝に私は注目する。

興味深い一覧表がある。「劇詩」すなわち戯曲のことだが、その題名を掲げて喜劇、史劇、悲劇などと注記したものだ。

1例をあげよう。

「“The Comedy of Errors.” 閩県林紓訳作《學誤》一五九一年」と表示する（カッコをあてがったのは文集編集者だろう）。

この一覧表には、同じくシェイクスピア作品の英文原題に添えて『吟辺燕語』に収録してある20作品をすべて掲げる。

解説して「この表のなかの『鬼詔』『黒瞽』『蠱徴』『女変』など4篇は、通例「4大悲劇」と称せられる」（397頁）と書く。シェイクスピア戯曲を説明するために、林訳ラムの題名を利用するのだ。しかも、この4篇だけではこの「大詩人」の蘊奥を窺うのは不足する、という。劇作家ということばのなかった時代のイギリスでは、シェイクスピアを詩人と呼んでいた事実をふまえている。

戯曲についてよく理解している王国維が、小説化本のラム、それも林訳を併用してシェイクスピア名で一括りにしている。

本来ならば、中国の研究者は、王国維も戯曲と小説の区別をつけていないと批判しなければならないところだ。

だが、林紓は批判するが、林と同じことをした王国維は批判しない。これを普通は評価の二重基準という。つまり、中国の学界において林紓批判は公認となっている。林紓については、どのように罵ろうが許されるのだ。

当時の中国では、戯曲と小説を区別しないことがあった。たとえば、「伝奇小説」と角書があって実態は戯曲という例を多く見ることができる*6。

林紓を批判した鄭振鐸自身が、当時、小説と戯曲が区別されていなかった事実があることを書いている。

彼の前出論文「林琴南先生」にこうある。

中国の旧文人は小説と戯曲の区別をつけることができず、たとえば『小説考証』という本は、小説といいながら無数の伝奇をそのなかに含ませている。

上記は、蔣瑞藻『小説考証』(上海・商務印書館1919.9 / 1935.5国難後第1版)についていっている。

当時の一部では、小説と戯曲を区別しなかった。しかし、それは林紘とは関係がない。鄭振鐸は、それをよく理解していた。だが、彼がここでも巧妙なのは、その事実を本来は関係のない林紘に適用したことだ。林紘否定の根拠に利用した。鄭は、林紘を含めた昔からの文人に、いかにも知識がなかったように説明した。新しい感覚を基準にすえて古い認識を切って捨てた。これこそが文学革命派の思考方法である。

以上の例を見れば、シェイクスピアとラムをめぐる林紘の把握のしかたはあきらかだ。

林紘は、シェイクスピア戯曲と『シェイクスピア物語』の違いを認識したうえで、後者を翻訳の底本に選択した。当時の中国人読者にはその方が理解しやすい、適切だという判断が働いたものだろう。劉半農、鄭振鐸がというような、林紘は無知愚昧だから戯曲と小説の区別をつけることができなかつた、というわけでは決していないのである。

「区別がつかない」論は成立するか

そもそも、林紘は「戯曲と小説の区別をつけることができなかつた」とは、何を説明しているのだろうか。あるいは、戯曲とは異なる小説を並べて、林紘は両者の区別がつかなかつた、となぜいうことができるのか。

劉半農がいいはじめ、鄭振鐸が決定づけた「区別がつかない」論を簡単に検討しておく。

劉鄭のふたりが行なつたこの有名な断定について、いままで異議を提出した人がいるとは聞いたことがない。それが定説であるからだ。定説だから、内容の検討は行なわれない、という循環論だ。林紘は「戯曲と小説の区別をつけることができなかつた」と書けば、それがそのまま無条件で林紘批判になる。

再度いう。「区別がつかない」とは何を言っているのか。

林紘は無知だから戯曲と小説の区別がつかなかった。いかにもありそうな話だ。古くからの文人で、外国語を理解せず、外国文学についての知識もない。そういう人物が口述翻訳を筆記している。翻訳の内容はデタラメに決まっている。シェイクスピアの戯曲、イプセンの戯曲を小説体にかえて翻訳した。呈示されるのは、いつもこういう思考の流れなのだ。

だからこそ、研究者は「区別がつかない」と書いて林紘を批判し、それで説明したつもりだ。より詳しく解説する人は誰もいない。

林紘批判の理由にされているのはわかる。だが考えれば、その内容はあやふやで、はっきりしない。検討する必要がある。

最初に登場した劉半農は、林紘を批判してこう書いた（前出「文学革命之反響」。傍線省略。以下同じ）。

『吟辺燕語』は本来はイギリスの戯曲だが、林氏は「詩」と「戯」のふたつについて、明確には識別していない〔吟辺燕語本来是部英国的戯考，林先生於『詩』『戯』兩項，尚未辨明〕。

劉半農は、林序にでてくる「詩」をそのままの詩だと理解した。まったく疑問を感じていない。「詩」と「戯」を対比しているところからそうとわかる。

だが、ここの「詩」は、上述のように戯曲を意味する。劉の説明をあらためて日本語に翻訳すれば、林紘は「戯曲〔詩〕」と「戯曲〔戯〕」の区別がつかない、ということになる。これでは論理が成立しない。劉半農は、林序を読んだが内容を理解していないのである。理解せずに林紘を批判した（つもりだ）。私にいわせれば、批判になっていない。

一方の鄭振鐸は、どうか。

鄭振鐸は、林紘を痛罵してつぎのように書く。あまりにも有名な記述だ。のちの研究者の多くは、鄭論文のこの部分にもとづいて林紘批判をくり返すのである。前出「林琴南先生」から、すこし長い引用して翻訳する。

またもうひとつ、たぶん林氏は彼の口述翻訳者によって誤らされたのだろう。小説と脚本〔戯劇〕は、性質はもとよりまったく異なっている。しかし、林氏は、多くのとてもすばらしい脚本〔劇本〕を小説に翻訳してしまった　多く

の叙述を加え、多くの対話を削除し、原本とはまったく違う本に変えてしまったのだ。たとえばシェイクスピアの脚本『ヘンリー4世[亨利第四]』、『リチャード2世[雷差得紀]』、『ヘンリー6世[亨利第六]』、『ジュリアス・シーザー[凱徹遺事]』およびイプセンの『幽霊[群鬼(梅孽)]』などすべて彼により翻訳されて別の本に変えられてしまった。原文の美しさと風格、および重要な対話は完全に消滅してしまった。これはまったくチャールズ・ラムが『シェイクスピア物語』で行なったことをまねしたもので、なぜ「原著者シェイクスピア」「原著者イプセン」と書かねばならないのか。林氏はたぶん小説と戯曲の区別がそれほどわかっていなかったのだろう[這箇直歩武却爾斯、蘭在做莎氏樂府本事又何必写上『原著者莎士比亞』及『原著者易卜生』呢？林先生大約是不大明白小説与戯曲的分別的]。

漢語原文の「分別」は、日本語で「区別」と訳しておいた。「違い」と置き換えても同じだ。林紓は、「小説と戯曲の違いがそれほどわかっていなかった」。

鄭振鐸は、この文章を自分で書きながら内容を理解していたのであろうか。自分ではわかっていると考えているから発表したに違いない。鄭は、後に該文を自らの論文集に収録したが、この部分は書き換えてはいない(私がわざわざこう書くのは、初出のある部分を鄭は後に削除しているからだ)。変更の必要はないという鄭の判断だろう。しかし、どう考えても奇妙な論理である。

林紓は戯曲を小説に書き換えた。クイラー=クーチ、デルの原本を知らなかった鄭振鐸だからそう断定した。

チャールズ・ラムを出してきた。ラムはなにをしたか。シェイクスピア戯曲を小説に書き換えた。それも事実だからかまわない。そこで筆を止めておけばよかった。しかし、それだけでは林紓批判としては弱い、と鄭振鐸は考えたらしい。

問題は、つぎだ。

鄭振鐸は、そこから飛躍して、林紓には戯曲と小説の区別がついていない、と罵った。劉半農がいはじめた「区別がつかない」論を、鄭振鐸は忠実に継承した。この部分が、まさに鄭振鐸の立論を破壊したのだ。自分で行なったから、これは自滅である。

よく考えてほしい。戯曲を小説に書き換えた林紓に、戯曲と小説の区別がついていないのであれば、ここで名前を出しているラムも同様ではないか。ラムも戯曲と

小説の区別をつけることができなかった。鄭振鐸は、そう言明しているのかわからない。

よりもよって、シェイクスピア戯曲について詳しいラムをつかまえて、戯曲と小説の区別がついていない、と鄭振鐸はよくもいったものだ。ラム姉弟は、区別がついているから戯曲を小説に書き換えたのだ。

不思議な鄭の説明になる。鄭振鐸が、そんなことは書いていないと主張しようが、彼の文章を読めば、文脈からしてそうならざるをえない。だから、私は、鄭は自分で書いてその内容を理解しているのかと疑問を提出した。

林紘を罵ることはラムを批判することになる、となぜ鄭振鐸は気づかなかったのか。また、のちの研究者は、なぜそうなることを考えなかったのか。

これが奇妙でなくてなんであろう。この部分について、論理を組み立てる能力はあるのか、と疑われてもしかたがない。

クイラー＝クーチ、デルの原作が存在していることは、鄭振鐸の林紘批判が根本的に間違っていることを証明した。しかし、「区別がつかない」論は、それ自体が論理として最初から破綻している。

以上をまとめるとこうなる。

林紘の死後、鄭振鐸は論文「林琴南先生」を発表して林紘批判を決定づけた。林訳シェイクスピアに関して、林紘は戯曲と小説の「区別がつかない」、と鄭は書き添えた。勝者の驕りからだろう、林紘を批判するためにより強い言辞を文章にどうしても盛り込みたかった。先行する劉半農の断言を承認して継承したのだ。まことに不用意であった。先にラムの名前があげてある。両者が出そろったその瞬間に、「区別がつかない」論そのものが最初から論理破綻していることに光が当たった。

いってみれば、林紘を標的にして引き絞った矢は、放たれるやラムのところで反転し劉半農鄭振鐸自身を襲うことになったのである。知らないのは劉鄭らご本人ばかりだ。

いや、のちの研究者も同様だといわなくてはならない。

研究者は、「区別がつかない」論を疑うことなく受け入れ支持し引用し振りかざして林紘を罵ったつもりだ。だが、「区別がつかない」論を使って林紘を罵倒すると、批判の矢は林を素通りして劉半農、鄭振鐸らを射て確実につらぬく。それと同時に、引用した人が致命傷を受ける。「区別がつかない」論が成立しないことを、引用した本人が理解していない。みずからの無知をさらけ出す結果になるからだ。

研究者にとっては自殺行為なのである。林紘を批判しているつもりの人たちには、その自覚がまったく、ない。

中国現代文学研究の学界では、80年をこえてこういう状況が続いているのだ。まるで悪い冗談ではないか。これほどの皮肉を私は見たことがない。

劉半農と鄭振鐸が提出したこの論理とも呼べないものを、どうして研究者たちは容認したのだろうか。定説だからだというよりほかになさそうだ。現在もそう主張して林紘を罵る研究者がいる*7。私にはその方が珍妙に思われる。

林紘批判は決まった方針だ。なにをどう言っても許される。ゆえに、攻撃する側の論理には整合性を必要としなかった。そうとしか考えられない。

複数の版本

ふたたび、林序にもどる。

林紘らが『シェイクスピア物語』については複数の版本を手元においていたところに目を向けていただきたい。

林紘と魏易は、『拿破侖本紀』の翻訳に従事し、時には夜にまで至ったものか。一休みしている時、このようなものがあります、と魏易が差し出したのがラム姉弟の『シェイクスピア物語』だった。

林紘の説明を読んで、もしかりに以上のような情景が目浮かぶとすれば、それは彼の筆のうまさだろう。あるいは、誰もが引用言及するその部分だけしか読まないからだ。

林紘らは、ラム版『シェイクスピア物語』1本のみを偶然に翻訳したわけではない。準備をしたうえで実行している。次を見てもらえばわかる。

林序の末尾はこうだ。

『シェイクスピア物語』は、伝本がきわめて多い。比較すると異同がはなはだ多く、取捨選択している。この本は20作を収録しているだけだ。私はそれらに新しい名をつけて題目とする〔莎詩紀事。伝本至夥。互校頗有同異。且有去取。此本所収僅二十則。余一一製為新名。以標其目〕。

理解するための手がかりがここにある。

「莎詩紀事」と明示してあるところを見てほしい。なんともいうように「莎詩」

はシェイクスピア戯曲だし、「紀事」とはそれをもとにした物語だ。『シェイクスピア物語』そのものを指す。これについて「伝本がきわめて多い」と説明している。

林紘らはラム版だけをたまたま1冊入手し、適当に翻訳したのではない。林紘は「序」においていかにも偶然に訳しはじめたように書いているが、これはことばのアヤである。

見てほしいのは、伝本が多く異同もある、と説明しているこの箇所なのだ。林紘らは、ラム版を含んだ小説化本複数を手元においてそれらを比較していることがわかる。

林紘は、1903年より京師大学堂訳書局において働いている。林訳の原本は、その蔵書なのか。購入していたとすれば、それは林紘よりも共訳者と考えたほうがいいか。外国の書籍は、北京のどの書店から購入できたのか。それとも上海の書店からか。林は、別のところで魏易が「ディケンズ全集」を購入していると書いてはいる。だが、林訳の底本になったラム版の入手経路については、まだ誰も追究していないようだ。中国の学界では林紘を批判するのに忙しい。論じることにかまけて、地道な研究には力がはいらないと見える。

林紘のいう「伝本がきわめて多い」というその伝本は、どういう書籍だったのか。私は調べる価値のある問題だと思うのだが、それすら明らかにはされていない。すでに100年が経過している。林紘の蔵書がどうなったのかを説明した文章を私は知らない。今にいたるまで罵り続けているのだから、跡形もないのだろう。それとも福建の林紘故居には保存されているのだろうか。あるとも聞かないが、『張元濟全集』第1-3巻書信（北京・商務印書館2007.9）が刊行された。上海・商務印書館は、林訳小説をあれだけ多数刊行したにもかかわらず、林紘の書簡は1通も収録していない。問い合わせてみれば、事実として1通も存在していないという。意図的に隠滅しなければありえない事であろう。関連して触れたのは、林紘関係資料、特に翻訳の底本はまったく保存されていないらしいことをいいたいからだ。私の誤りであればいいと思う。

そもそも、『シェイクスピア物語』を作ったのはラム姉弟しかいなかったわけではない。林紘たちが漢訳の底本にした可能性を持つ英文小説化本をさがした経験が私にはある。1904年以前という時間を限定しただけで、ラム版のほかによく似た書名で10種前後の版本が刊行されていることを別稿で報告した。ラムではない別人が、シェイクスピア戯曲の小説化にそれだけ情熱を傾けている。私が短期間に収

集してその数にのぼる。

林紓は、のちに陳家麟と共同でシェイクスピア歴史劇を漢訳する。その時の底本はクイラー＝クーチの『シェイクスピア歴史物語 HISTORICAL TALES FROM SHAKESPEARE』である。林序に見える「伝本がきわめて多い」という中に、クイラー＝クーチ版は含まれていたのかどうか。共訳者が異なることを考えれば別かもしれない。詳細は不明だ。

研究者は、上に示した林序の重要部分をなぜ無視するのか。

よく読んでほしい。林紓らは、漢訳に際して複数の版本を集めて十分に準備をしている。ラム版がシェイクスピア戯曲そのものとは異なることを、当然、理解している。また、彼らはシェイクスピア戯曲も手元において漢訳に利用していた。

結 論

以上をまとめる。

『吟辺燕語』林序を読めば、彼はシェイクスピア戯曲とラム『シェイクスピア物語』を並置するだけで両者の関係を説明していないことがわかる。しかも、ラムの名前をだしていない。

そこからふたつの解釈が生まれる可能性がでてくる。

ひとつはこうだ。

説明がないから、林紓は戯曲を勝手に小説にかえて翻訳した、と判断した。「区別がつかない」論をかざして最初に批判したのは、劉半農である。

しかし、劉半農自身がラムの存在を知らなかった。あるいは知らないふりをした。その延長線上に鄭振鐸がいる。彼のばあいはシェイクスピア歴史劇に小説化本があるとは知らなかった。彼らの林紓批判は間違っていたのだ。

鄭振鐸は、「戯曲と小説の区別がつかない」と書いて林紓を罵倒した。劉半農のいう「区別がつかない」論そのものが破綻していることに気づいていない。

そもそも林序にでてくる「詩」が戯曲を意味していることを彼らは知らない。林紓が戯曲と小説を区別していた事実など、劉鄭にはどうでもよかったのだ。はじめから林紓批判を決定していた。

この事実を知れば、従来からの解釈、すなわち林紓無知説、「区別がつかない」論に賛成できるはずがない。

もうひとつの解釈は、こうだ。

シェイクスピア戯曲は、あくまでもシェイクスピアの作品である。それをもとにして小説化した『シェイクスピア物語』は、ラムの作品であるのはいうまでもない。林紘は、そう正しく認識している。林にしてみれば、シェイクスピア戯曲をラムが小説化したことは明らかだ。ただ、知ってはいたが説明しなかった。

私は、こちらの見方を提出する。

「シェイクスピア著、ラム改作、林紘+魏易共訳」と表示すれば問題はなかったかもしれない。ただ、「ラム改作」を省略した。クイラー＝クーチ（またはデル）の原作を漢訳した時も同様である。

もともとシェイクスピア作品なのだからシェイクスピアといえれば十分だ。シェイクスピア戯曲を知っていた林紘はそう考えた。

シェイクスピアという名称でくくったから表面上は両者の区別がついていないように見える。しかし、そう見えるだけのこと。林紘以外では『滄外奇譚』の訳者も、王国維も理解したうえで同じことをしている。

劉半農と鄭振鐸のふたりは、林紘がシェイクスピア戯曲から直接小説化したと考えた。林紘はシェイクスピア戯曲を知っていたことになる。林紘は戯曲の存在を知っていて、戯曲と小説の区別がつかない、と劉鄭は説明する。論理が矛盾しておりもともと成立しない。

劉鄭の林紘批判を受け継いだ阿英は、彼らよりも非難の度合いを強めた。阿英は、林紘がシェイクスピア戯曲そのものを知らないかと断定したのだ。ところが、林紘には、シェイクスピア戯曲から直接取り入れた部分がある。その事実が、阿英の下した断定を否定する。

今も「区別がつかない」論、阿英説をくりかえす研究者が絶えない。いずれもが成立しない論理に目をつむったままであるのが私には不思議に思われる。

林紘を非難する根拠は、ないのだ。にもかかわらず有無をいわず痛罵する。私にいわせれば「林紘を罵る快樂」である。

林紘批判があらかじめ設定されている。ゆえに、阿英は、林紘に書かれた文章の字面だけを見て欠点だと思われる部分を探す。林紘がシェイクスピア戯曲と『シェイクスピア物語』の関係を説明していないところのみをつかまえる。その結果、もとの戯曲そのものを知らない、という誤った断定に短絡した。

阿英の引き起こしたもうひとつの林紘冤罪事件が存在するのは、以上の事情による。

【注】

- 1) 顧燮光「小説経眼録」原載『訳書経眼録』1927 / 『晚清文学叢鈔』小説戯曲研究巻。539頁 / 顧燮光『訳書経眼録』杭州・金佳石好楼 甲戌(1934)夏五月。王韜、顧燮光等編『近代訳書目』北京図書館出版社2003.10影印本所収。614頁。「吟辺燕語一卷 商務印書館 洋装本 / 英莎士比著, 林紓、魏易同訳。書凡二十則, 記泰西曩時各佚事, 如吾華《聊齋志異》《閱微草堂》之類。作者莎士比, 為英之大詩家, 故多瑰奇陸麗之譚。訳筆復雅馴雋暢, 遂覺豁人心目。然則此書殆海外《搜神》, 歐西述異之作也夫」。また、熊月之主編『晚清新学書目提要』(上海世紀出版股份有限公司、上海書店出版社2007.12) に収録されている。
- 2) 吳宓著、吳学昭整理注釈『吳宓日記』第1冊(1910-1915) 北京・生活・讀書・新知三聯書店1998.3。123頁
- 3) 朱東潤「自伝」『中国当代社会科学家』第1輯 北京・書目文献出版社1982.5
- 4) 以下を参照した。林薇選注『林紓選集』文詩詞巻 成都・四川人民出版社1988.7。許桂亭選注『林紓文選【注釈本】』天津・百花文藝出版社2006.10
- 5) 「海[澣]外奇譚」『中国近代文学大系』第11集第28巻翻訳文学集三 上海書店1991.4。

2008年6月15日報告会で瀬戸宏が配付した資料に『澣外奇譚』表紙、叙例、目次、本文1頁の影印があった。本稿を書いたあとに入手したので引用文は大系版によっている。

- 6) 左鵬軍は、樽本編『新編増補清末民初小説目録』(済南・齊魯書社2002.4) について「不備」があることをたびたび指摘している。

左鵬軍の文章は、以下の3本である。

「《新編増補清末民初小説目録》所録伝奇雜劇補述」『清末小説から』第69号2003.4.1

「《新編増補清末民初小説目録》補正」中国近代小説研究会論文 2007.10天津

「《新編増補清末民初小説目録》匡補」『明清小説研究』2007年第4期(総第86期) 2007発行月日不記

小説目録とうたいながら、戯曲、伝奇、雜劇が混入している、と左鵬軍はいう。樽本が不注意で区別していないと左鵬軍は考えているらしい。私が意図的に混入させていることを理解しない。なぜわざと混入させているかといえば、

当時は戯曲と小説を区別しないばあいもあったからだ。ゆえに、「小説」と表示している作品は、私の目につく限り目録に収録した。

左鵬軍の指摘は、そのまま目録に追記して反映させている。戯曲、伝奇であっても私は目録から削除しない。当時の状況がわかるような目録になるように工夫しているからだ。そればかりか、収録範囲を拡大し戯曲も追加している。小説を戯曲化する状況がわかるようになれば、これも興味深いと考える。

7) 林紘研究の専門書が「区別がつかない」論をくりかえしているのは、かえって問題が大きい。

林薇『百年沈浮 林紘研究綜述』（天津教育出版社1990.10）がある。定番のようにして、林訳の欠点をいくつか掲げている。そのひとつが、「小説と脚本を混同した」（167頁）だ。林薇は、そうと紹介するだけで反論していない。ということは、林薇も「区別がつかない」論を認めているのだ。林紘は中国翻訳文学の基礎を築いた人物だ、とべつの場所でいくら賞賛しても、基本の部分で罵倒しては評価したことにはならない。

前出の韓洪拳『林訳小説研究 兼論林紘自撰小説与伝奇』がある。「林紘は時に脚本を誤訳して小説にした」（125頁）とのべて「ジュリアス・シーザー」などをあげる。「このような状況が出現したのは、口述翻訳者が体裁について林紘にはっきりと説明しなかったか、あるいは口述翻訳者が外国の作家が書き改めた物語を訳したかであろう」。鄭振鐸の「区別がつかない」説をなぞっている。林紘ではなく共訳者の責任にしたのも、鄭説を取り入れた結果だ。

李偉民は、『中国莎士比亚批評史』（北京・中国戯劇出版社2006.6. 14頁）において鄭振鐸の当該文章を引用している（ただし、「区別がつかない」部分の直前まで）。李も異議をとらえていない。李偉民は、鄭説に賛成しているとわかる。

（たるもと てるお）